

土岐市の文化財展 Part1

文化財でたどる 美濃焼の歴史



◎美濃唐津花入・元屋敷窯出土
重要文化財



○八剣神社の狛犬・八剣神社蔵
市指定文化財



○香炉・崇禪寺蔵
市指定文化財



○八王子神社の高坏・八王子神社蔵
市指定文化財



○四耳壺
市指定文化財

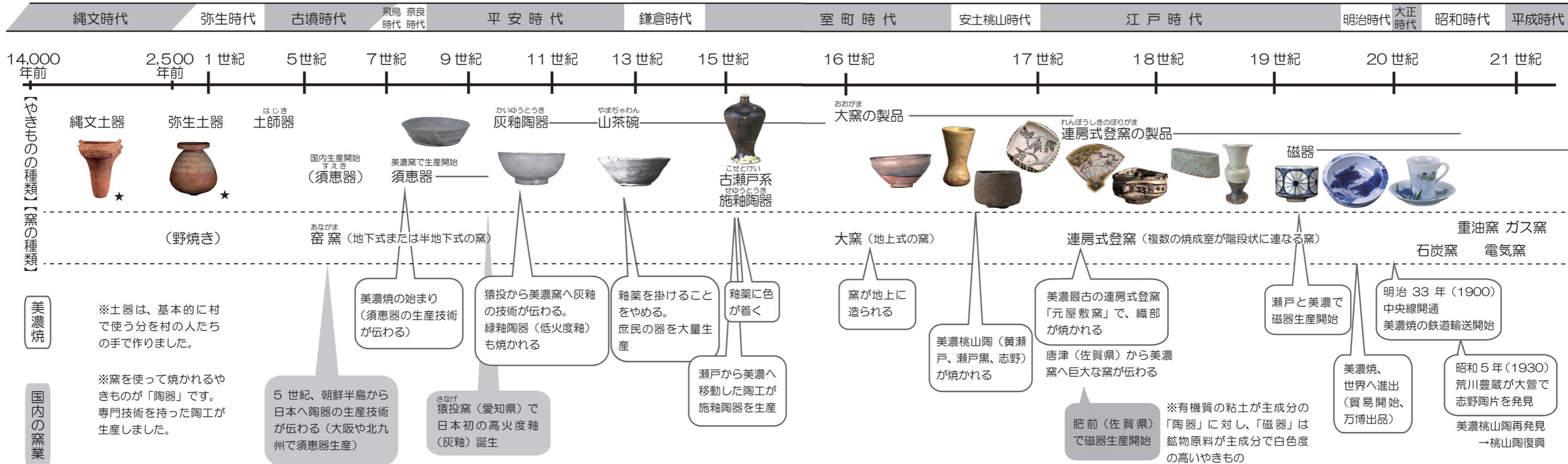
- ◎国指定文化財
- 県指定文化財
- 市指定文化財

土岐市美濃陶磁歴史館

期間：平成 30 年 11 月 30 日（金）
～平成 31 年 2 月 24 日（日）

美濃焼歴史年表

※現在の岐阜県多治見市・土岐市・瑞浪市（東濃地方）を中心とする地域で生産された陶磁器を「美濃焼」、美濃焼が生産された窯業地のことを「美濃窯」と呼びます。



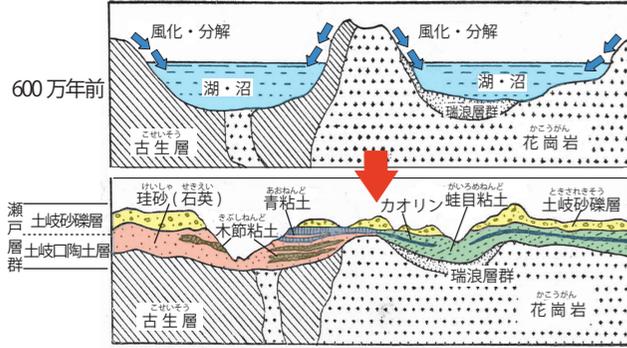
一窯とロクロの技術伝わる一

★東京国立博物館デジタルコレクション

美濃焼の技術

東濃地方では1300年もの間、美濃焼の生産が続いてきました。美濃焼の長い歴史を支えてきたのは、豊富な原材料と蓄積された技術力でした。

【東濃地方に陶土層ができるまで】



『多治見市史』通史編上 図3に加筆

大昔に海だった東濃地方では、600万年前頃に海が退いていき、くぼ地に湖や沼ができあがりました。陸地となったところで風化分解した花崗岩などが湖沼に堆積していき、やがて陶土層ができあがりました。これは一般に「瀬戸層群」と呼ばれ、下層の「土岐口陶土層」が木節粘土や蛙目粘土などを含む陶土層となり、上層の「土岐砂礫層」と接する辺りからは鉄分を含む壺石や鬼板が産出し、絵付けや釉薬の着色材として用いられてきました。

【釉薬の発見】



愛知県の猿投窯で、焼成中の窯内で須恵器に灰が付着して溶け、ガラス質になることを発見⇒焼成前の素地に水で溶いた灰を掛けて焼成するようになります。=「灰釉」の誕生

平安時代(9世紀)、東濃地方へ技術が伝わり、「灰釉陶器」が生産されました。



古瀬戸系施釉陶器・鉄釉天目茶碗 下西山窯出土

室町時代(15世紀)～ 鬼板(酸化鉄)などを釉薬に混ぜ、釉薬に色が着くように。

【成形の工夫】

古墳時代(5世紀)、朝鮮半島から伝わったやきものの技術の1つにロクロがありました。回転を利用して成形されるやきものは、円形が基本でした。



土型(左)と型で成形された皿(右) 清安寺窯出土・江戸時代(17世紀)

安土桃山時代(16世紀)になると、型を用いた成形技法が



型を使って様々な形に! 扇形の青織部向付 元屋敷窯出土・江戸時代(17世紀)

明治時代以降、西洋から石膏型の技術が入り、現在では、型によって生み出せる形状は無量大!

【装飾の展開】

美濃焼の装飾の始まりは、灰釉陶器に線刻で絵や文字を彫ったものです。



仏画が線刻された灰釉陶器 大針起4号窯出土 多治見市教育委員会蔵



印花が施された灰釉折縁皿 元屋敷東1号窯出土

室町時代(16世紀)には、線刻に加え、「印花」というスタンプを素地に押印する方法なども行われ、文様表現が豊かになっていきます。

安土桃山時代(16世紀末)、「志野」で筆による絵付けが本格的に始まりました。



鉄絵が施された志野大鉢 元屋敷東窯出土



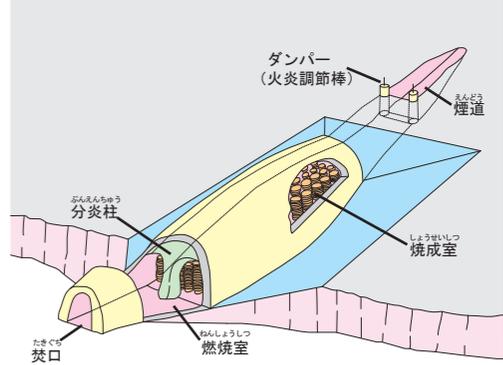
型紙を用いて絵付けされた摺絵皿

明治時代(19世紀)以降、摺絵や銅版転写など、量産に対応した多様な絵付技法が生み出されます。

【窯の変遷】

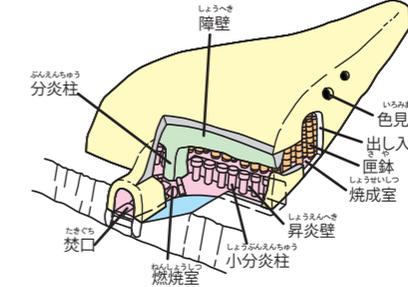
① 竈窯 飛鳥～室町時代(7～15世紀)

山の斜面をトンネル状に掘り抜いた窯です。須恵器から山茶碗の生産まで約900年にわたって、徐々に改良されながら使用されました。 ※模式図は山茶碗を焼成した窯です。



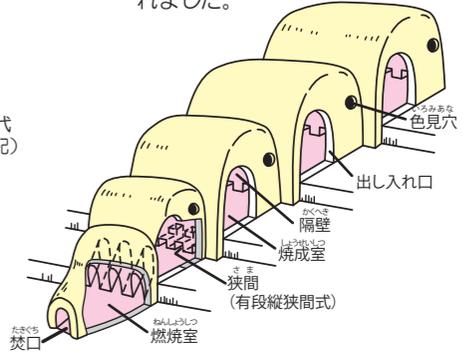
② 大窯 室町～江戸時代(15～17世紀)

窯が地上に造られるようになり、竈窯に比べ熱効率がよくなりました。天井が高くなり、側面に製品の出し入れ口が設けられました。



③ 連房式登窯 江戸～昭和時代(17～20世紀)

複数の焼成室が階段状に連なる窯で、美濃焼の大量生産化が進みました。江戸時代初頭に唐津(佐賀県)から導入され、昭和時代まで使われました。



美濃焼の流通

長い歴史をもつ美濃焼は、その時々々の需要を巧みに捉え、製品の種類や出荷先を変えてきました。そして、その製品は全国各地に流通しました。

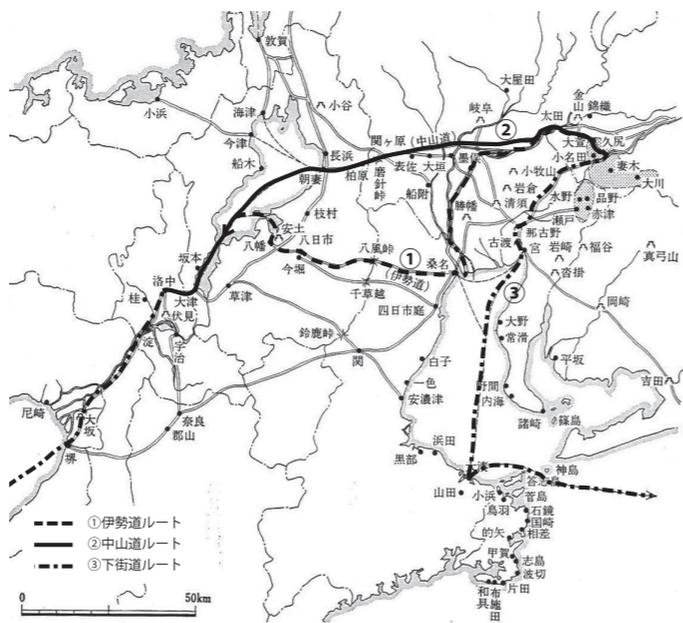
【平安時代】



〈長野県松本市の遺跡から出土した灰釉陶器と緑釉陶器〉
堀の内遺跡 4号住居址出土 松本市教育委員会蔵

平安時代、貴族層向けに作られ始めた灰釉陶器や緑釉陶器はしだいに生産を拡大し、武士や農民層まで需要を拡大していきました。内陸の主要幹道「東山道」に近く、原材料も豊富だった東濃地方は、一大窯業地として発展し、その製品は全国各地に流通しました。

【安土桃山時代～江戸時代初頭】



〈室町時代～江戸時代初頭の瀬戸焼・美濃焼の流通経路〉
瀬戸市 1993『瀬戸市史』陶磁史篇(四)に加筆

志野や織部といった茶陶「美濃桃山陶」は、久尻や大萱(可児市)など、土岐川以北が生産の中心地となりました。その製品の多くがルート②(中山道ルート)を通じて、茶の湯の流行の中心地だった京都や大阪へ出荷されました。



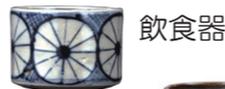
京都で出土した美濃桃山陶
京都市蔵・京都市指定文化財

【江戸時代】

江戸時代になると、海運を利用し、大都市江戸に向けて美濃焼が大量に出荷されるようになります。江戸時代中期には人口 100 万人を超えたともいわれる江戸は、外食文化や飲酒習慣、小動物の飼育や植木の趣味など、独自の文化や生活様式が発展しました。美濃焼は江戸の暮らしの様々な場面で用いられ、江戸の庶民の暮らしを支えました。

江戸の暮らしを支えた美濃焼

単身赴任の男同士、ドジョウ鍋や猪鍋をつつきながら、一杯！



飲食器

湯呑



灯火具

ひょうそく



化粧道具

ピンダライ

髷付油をいれる容器。化粧道具には絵付けて遊び心を加えて。



外食と飲酒



貧乏徳利

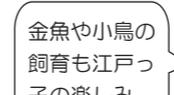
多治見市教育委員会蔵



仏具

仏花瓶

家の仏壇や神棚には供えをかかさず。



小鳥の飼育

餌猪口(小鳥の餌入れ)

金魚や小鳥の飼育も江戸っ子の楽しみ。

【明治時代～】

明治時代(19世紀)以降、石膏型や機械ロクロなどの技術を欧米から導入し、美濃焼は大量生産化を加速します。それに加えて、明治33年(1900)に中央線多治見駅一名古屋駅間が開通、同44年(1911)には中央線全線が開通し、鉄道による美濃焼の大量輸送が始まります。鉄道網の広がりとともに、美濃焼は北海道から九州地方まで全国に流通し、一般家庭に普及していきます。



染付銅版飯茶碗

【世界へ羽ばたく美濃焼】

明治維新を迎えると、世界へ目を向ける商人や生産者も現れます。高度な技術力を駆使した海外向け的美濃焼は、万国博覧会へも出品されました。また、自ら海外へ出店し、美濃焼の世界展開へ乗り出した商人もいました。



多治見から中国へ出店した山竹商店上海支店
多治見市図書館提供



西浦焼釉下彩珈琲碗皿

伝統工芸
としての
陶芸家誕生

荒川豊蔵による桃山陶復興

安土桃山時代に美濃窯で誕生した美濃桃山陶は江戸時代初頭に生産が終了し、やがて、この地で志野や織部が焼かれていたことは忘れ去られていきました。

昭和5年(1930)、大萱おおがや(現可児市)の山中で荒川豊蔵が筍絵の描かれた志野陶片を発見し、その頃は瀬戸焼と思われていた志野や織部が、実は美濃焼だったことが明らかになりました。豊蔵は山中に残る古窯跡や出土する陶片を研究し、瀬戸黒、志野など美濃桃山陶の復興に取り組みました。

そして、桃山陶の再現に留まらず、自己の芸術表現を追求して独自の作風を確立し、昭和30年(1955)に志野と瀬戸黒の技法で国の重要無形文化財保持者(いわゆる人間国宝)に認定されました。

【桃山復興に取り組んだ第一世代】

荒川豊蔵に続き、自身のルーツを美濃桃山陶に見出し、復興に取り組む陶芸家たちが現れます。

元屋敷窯のあった土岐市泉町久尻に生まれ、豊蔵と同時期に桃山陶の復興に取り組んだのが林景正・加藤景秋兄弟でした。



はやしかげまさ
林景正 (1891～1988)

黄瀬戸

岐阜県重要無形文化財保持者



かとうかげあき
加藤景秋 (1899～1972)

志野・織部

岐阜県重要無形文化財保持者

【土岐市初の人間国宝】

土岐市駄知町の製陶業の家に生まれた塚本快示は、陶芸家で古陶磁研究者であった小山富士夫の著書『影青襍記』いんちんしゅうきに感銘を受け、青白磁の研究を始めます。

昭和58年(1983)に白磁・青白磁の技法で重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定されました。



つかもとかいじ
塚本快示
(1912～1990)

白磁・青白磁
国・重要無形文化財保持者

発行日：平成30年11月30日

編集：公益財団法人土岐市文化振興事業団

岐阜県土岐市泉町久尻 1263 TEL.0572-55-1245